

## R8 若葉小学校 校内研 研究概要

### (1) 研究主題

#### 「自分から学び、考え、やりぬく若葉っ子の育成」

～ 自立した学習者を育てる授業デザインの在り方を求めて ～

### (2) 主題設定の理由

近年、人工知能（AI）、ビッグデータ、Internet of Things（IoT）、ロボティクス等の先端技術が高度化し、あらゆる産業や社会生活に取り入れられた Society 5.0 時代が到来しつつある。学校教育の情報化に関しては、令和元年 6 月に学校教育の情報化の推進に関する法律が公布・施行され、GIGA スクール構想により新たな学校のスタンダードとして学校における高速大容量のネットワーク環境の整備を推進するとともに、令和 3 年度から児童生徒 1 人 1 台端末環境での学習が開始された。

一方で、近年の不安定な世界情勢、様々な社会問題や環境問題など私たちを取り巻く世界は、ますます複雑化し、問題解決の道筋すら見通せなくなっている。そのような中で、知識や技能を生き残るものとして働かせ、未知の状況の中でも互いに協働しながら粘り強く問題解決に向かうことのできる力の必要性が叫ばれ続けている。つまり、どのような状況においても学び続けることができる「自立した学習者<sup>1</sup>」の素地を育むことが学校教育に求められていると言える。

本校では「美しい心を持ち 自分から学び やりぬく子」を目指す子ども像とし、確かな学力を積み上げるために「若葉授業」の共通実践を行っている。「若葉授業」の共通実践により、児童が教科等の特性に応じた学習過程をたどることで、学習課題や各々がもつ問いに対して友達と考えを交流したり、考えを深めたりする姿が見られている。令和 4 年度から佐賀県教育委員会より「1 人 1 台端末を活用した授業改善研究指定」を受け、これまで取り組んできた国語科「書くこと」の研究を軸に「主体的な学び」「対話的な学び」「授業の UD 化」の視点から 1 人 1 台端末を活用した授業改善に取り組んだ。1 人 1 台端末を効果的に授業に仕組んで使ったことで、児童の学習意欲を高めたり、児童の感想や作品をリアルタイムで共有し自分の感想に生かしたり比較したりすることができ、書く力が高まり自分の考えを表現する力が身に付いてきた。また、「個別最適な学び」、「協働的な学び」を視点とし、1 人 1 台端末を活用した授業改善に様々な教科で取り組んできたことで、活用の意義や可能性が少しずつ明らかとなってきた。一方で、1 人 1 台端末活用を意識しすぎたために、授業のねらいがぼやけてしまうという課題も明らかとなった。今後は教科等の特性や授業のねらいに即した適切な活用方法を模索していく必要がある。

本年は、これまでの研究成果を生かし、自立した学習者育成に向けて、さらに学習活動や学習課題をどのように仕組んでいくのか、学習環境をどのように整えていくのか等を意識した授業デザインの在り方を探っていききたい。

### (3) 研究目標

「自分から学び、考え、やりぬく若葉っ子」を育てていくために、「個別最適な学び」「協働的な学び」の視点を中心においた授業改善の在り方を探る。

### (4) 研究仮説

1 人 1 台端末活用の利点を生かしたり、「個別最適な学び」「協働的な学び」の視点から手立てを工夫したりし、授業改善を行っていけば、児童が自立して学べるようになり、生きて働く確かな学力

<sup>1</sup> 自立した学習者必要な資質・能力として、「自己の学習目標を設定する」「学び方や学習環境を選ぶ」「自己の学習の様子をメタ認知する」「他者と議論し、自分の意見と比較して良さを取り入れる」等が考えられている。（千葉県教育センター 研究紀要第 32 号「自立した学習者の育成を目指す学びの在り方」2023）

を身に付けることができるであろう。

## (5) 研究内容

ア 学習の見通しをもち、自ら適切に学習課題を設定し、粘り強く学習に取り組んでいける手立て

【個別最適な学び】

- ・教科等の特性に応じた多様な学習の進め方の工夫
- ・個々の児童に応じた多様な学習の進め方の工夫
- ・自分の学習を振り返り、見通しをもたせる手立ての工夫
- ・粘り強く学習に取り組むための学習環境づくりなどの工夫

イ 一人一人のよさや可能性を生かし、異なる考え方が組み合わせたり、よりよい学びを生み出した  
りするような友達タイム（対話）の工夫

【協働的な学び】

- ・単元、題材等のねらいや発達段階に応じた形態、機会の工夫
- ・話し合う目的や意欲を喚起する話題提示や問いかけの工夫

ウ 一人一台端末活用の利点、可能性を意識した授業改善の取組の蓄積

- ① 学習履歴を残すことが容易であること
- ② 試行錯誤を伴う作業ができること
- ③ 学習者同士が情報を共有したり、共に作業したりできること
- ④ 多様な学習方法を提供でき、自主的、自発的な学習の促進につながる

## (6) 研究組織

ア 全体会……………全職員で研究協議会を行い、必要に応じて講師を招聘し、研究を深める。

イ 研究推進委員会……………3部会の1つである「確かな学び部」に研究推進委員会を置き、校長・教頭  
・確かな学び部員で構成し、主に研究の方向や方法について協議し、実践的  
研究のための計画立案・連絡調整を行う。

ウ 学年部会……………低学年・中学年・高学年・特別支援学級の学級担任及び級外で構成し、実践  
的研究を行い、本研究を検証する。

エ 情報化推進部……………情報化推進リーダーと低学年・中学年・高学年・特別支援学級から各1名で  
構成し、一人一台端末の使い方や機能を中心に研修等を企画・運営する。

## (7) 期待される研究の成果（めざす子どもの姿）

ア 学習環境を整えたり、一人一台端末の活用方法を工夫したりすることで、粘り強く学習に取り組  
めるようになり自己の学習活動を振り返り、次の学習につなげられる主体的な学習ができるよう  
なるであろう。

イ 「友達タイム」を充実させることで、児童が自分と他者の意見や考え方を比較したり、様々な考  
えに触れられるよさを認識したりし、自分の考えを広げたり深めたりすることができるようになる  
であろう。